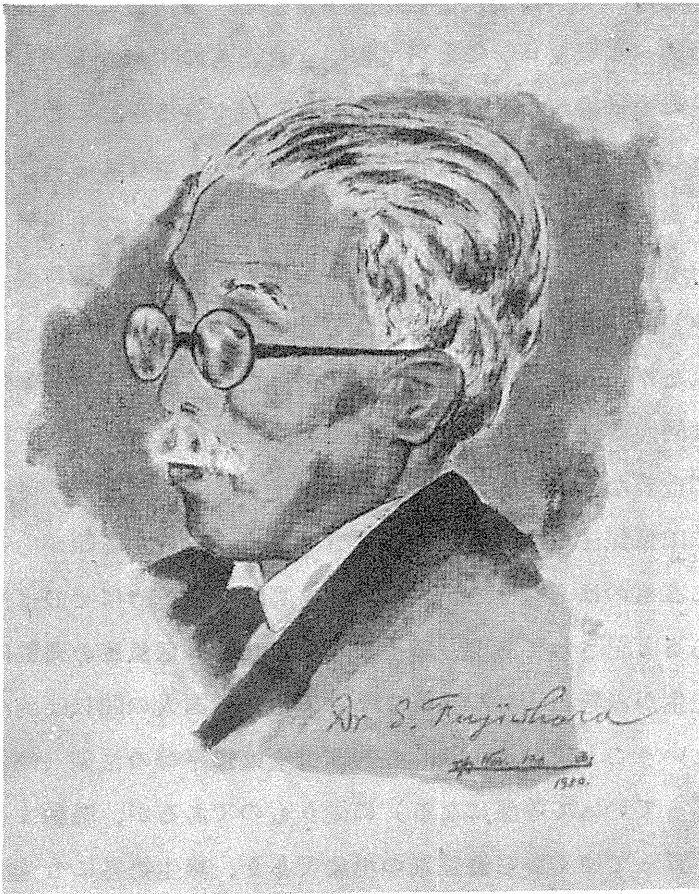


## 藤原咲平先生の思い出

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 佐々倉 航三  |
| 雑誌名 | 静岡地学  |
| 巻   | 4   |
| ページ | 19-23   |
| 発行年 | 1965-10-20  |
| 出版者 | 静岡県地学会  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.14945/00026158">http://doi.org/10.14945/00026158</a> |

## 藤原咲平先生の思い出

佐々倉航三



藤原咲平先生がなくなられたのは、昭和25年9月22日であったから、すでにまる15年も前のことになってしまった。私が藤原咲平博士という気象学者のいることを知ったのは、たしかに大正8、9年のことで、ちょうど私が中学へ入学した当時の頃のことであったように思う。私事に及んで恐縮であるが、私は小学校の4、5年生頃から気象現象に興味を持ち初め、自宅の物干台に手製の風向計や雨量計を設置して観測を楽しんだ。中学の3年頃からはすでに気象台発行の天気図や気象要覧、気象集誌などの専門雑誌を購読しはじめ、4年生のときには銀座の玉屋で待望のアネロイド晴雨計を買ってもらったが、それを翌大正12年の関東大震災で失ったときは残念でならなかった。私の祖父桐太郎は勝海舟と共に日本海軍を創始した男で、父は私を海軍

士官に仕立てる心算から船乗り稼業に必須な気象や気候に対する関心を10才の童心に植えつけたのであった。私が今日の貧乏生活に堕したのはここに因縁しているものであり、因果な生れと諦めている次第である。

高等学校時代に1度藤原先生にあてて気象学上のつまらぬ私の見解を記して手紙を差し上げたことがあり、それに対する先生の返事を今もなお大切に保存している。内容は両高気圧の中間には低気圧が発生し易いというまことに平凡な簡単なものであったが、先生からの懇切な返事に接したときの嬉しさは今も忘れられない。もともと先生は、いわゆる素人の観察や研究であるからとて無下に小馬鹿にするような人ではなかった。一応は取り上げてみて、十分に吟味するだけの誠意と真実味を持っておられた。世にいわゆる掠平虹（ムクヒラニジ：大地震の発生前に特殊な虹のような現象が見られるということで、昭和5年11月26日の北伊豆大地震の前日掠平氏がアスアサ4ジイズェオオジシンアリと京都大学あてに電報したことが見事に適中したので、それ以来有名になったのであるが、掠平氏

氏のいう虹がどんなものを指すのかどうしても要領を得ないらしい) に対しても最後まで、どうも何かあるらしいという考えをすて切れずにおられた。

先生は大正9年に浅間山爆発による音波の異常伝播に関する気象学的研究で学士院賞を受けられ、大正9年から10年にかけて欧米へ出張されたが、特にノールウェーのベルゲンではビヤルクネス父子の許で当時の新学説であった温帯性低気圧の波動論や構造に関する問題を研究された。温暖前線とか寒冷前線とかいう語は今日では万人の常識になっているが、大気が団塊運動をするために互に異なる気団(気団というはっきりした概念は、その後ベルジェロンによって提唱されたものである)との間には不連続面(前面とも称し、前面と地面との交切線がすなわち前線である)ができるということは当時としては新しい考え方であった。ベルゲンの地球物理学研究所で研究中の藤原先生はある日岸辺に立ってベルゲン港内の水の流れを凝視しておられたが、偶然にも異なる流れの境にいくつも出来る渦巻の中で、同じ向きに巻く(同性の渦巻)ものは相近づいていって融合し大きな1つの渦巻に発達するが、異なる向きに巻くもの(異性の渦巻)は相遠ざかる傾向のあることに気づかれたのであった。先生はその後終生渦巻の研究に心血を注がれたが、その発端は実にここにあったのである。同じ半球(北あるいは南)上においては低気圧同志は同性の渦巻であり、低気圧と高気圧とは異性の渦巻であるから、このような渦巻の研究は気象学上に重要な意義をもつのである。大正2年(1913)に刊行された岡田武松先生の気象学講話にはすでに(1)低気圧が両つ現われたときは互に相接近する傾がある。従って前のものは動き方が遅くなり、後にあるものは速くなる。(2)低気圧は高気圧のためにその進行の方向が変り、高気圧より遠ざかる傾向があると記されており、藤原先生はこれを高低気圧の運動に関する岡田の法則と名づけられたが、藤原先生が渦巻の実験で実証するまでは、外国人の間には岡田先生の説と反対の考えを持った人もあったということである。多くの物理現象は焔平等の法則(例えば高温の方から低温の方へ熱エネルギーが移っていって等温になる)に従うものであるが、渦動は選択作用によって同性のものは融合して大きく育ってゆくから造差別の現象であり、無生物界にも選択作用によって成長を営むこの種の1系統が存在するというのが先生の主張であった。その他重力の作用下では渦動は垂直軸に対して対称になろうとする傾向のあることに着目され、これを渦動に関する向対称の原理とみずから名づけられた。これは竜巻が上空では水平軸に近い気渦であっても、地面へ向って延びるにしたがい垂直軸の気渦に変わってゆく過程にも応用されるのではないかと考えられる。

私は数年前静岡の小鹿に在住中、毎朝通勤の途次バスを待ち合わせたが、いつも停留所の傍らの小川にできる渦巻の運動を見つめては藤原先生を偲んだのであった。"春小川双渦寄り添ひ結ばれつ亡き藤原先生しのばゆ"という拙い歌が朝日歌壇に拾われたのが機縁となって、宮終二先生のコスモス同人に入れてもらったというひとこまもある。

私は気象学を専攻したかったことはいうまでもないが、それには基礎学として実験物理学を習得すべきであるが、私の非才は如何としても数学に熟達し得ないので高等学校卒業後東大の地理学科へはいった。高校時代に独輯雑誌アトモスフィアと題するパンフレットを自費出版して知友に分けたり、下宿の裏庭に百葉箱を設けて観測を楽しんでいたほどの私であったから、藤原先生も私が物理学科へ

いかなかったことをいぶかっておられたそうである。しかし非才は非才なりに行くべき道もあると考え、気象学と地理学の間をたどることにした。今日の分科し発達した科学時代にそんな又的な途が残されていないように一応は考えられるが、物理的な気象学者は馬鹿らしくて手をつけるのを億劫がり、さりとて一般の地理学者には手にあまるような問題はまだまだ沢山に残されているのである。私は辻村太郎先生の教導によって小気候学を専攻することになったのである。

東大在学中には当時の諏訪中学校（今の清陵高校）の三沢勝衛先生の協力を得て1931、1932年の8、9月には長野県諏訪郡一帯に亘る降水量（測点46）と風向風力（測点18）の観測を実施した。30年余も前に実施した、この諏訪郡付近における雨量の小気候学的調査は日本はもちろん世界におけるこの種調査の最初のものではなかったかと自惚れている。

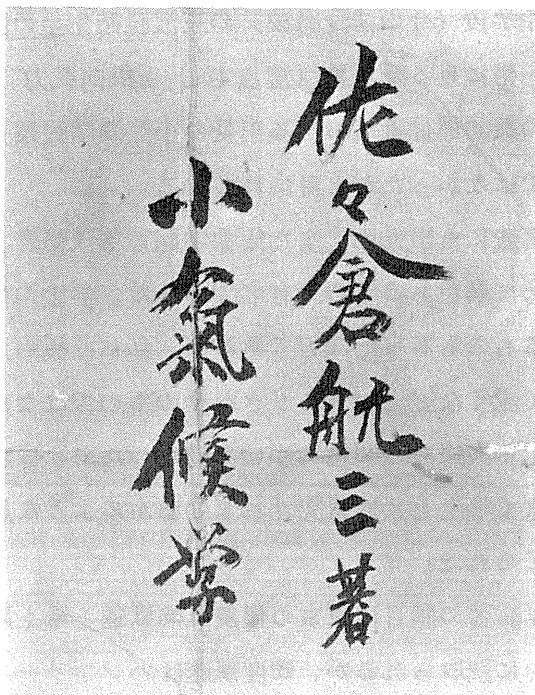
東大では難解の藤原先生の講義にも出たし、また気象学演習も淡路君と共同で受けた。藤原先生の講義というのがこれがまた極めて異色あるもので有名であった。学生の中には一体あれは講義の体をなしているのかなどと酷評するものもあったほどであるが、私には極めて風格あるものに感じられた。気象学を第1章から順を追って説くなどというありきたりのものではなく、先生が今日はこれを話そうとその都度思いつかれたらしい興味ある問題について説かれたように考える。スラスラと口述されるというよりはむしろ教室へ来て学生と共に研究されているかのような態度であった。それがかえって学者らしくて奥床しくも感じられた。

淡路君と共同でやった気象学演習の題目は東京の傾度風向風速と地上風向風速との比較であった。傾度風向は地上天気図から簡単に読取られるが、傾度風速はハンフリースの大気物理学の巻末にある図表を利用して求めるのであったが、気圧傾度を地上天気図から求めるのが実際にはなかなかうまくゆかず、馬鹿でかい風速が出てしまうことが少なくなく、それで気象学演習もとにかく敬遠しがちでいたところ、とうとう藤原先生から大目玉ではないが、お目玉を頂戴してしまったこともあった。

私は東大卒業後は東京開成中学校に数年間勤務し、それから陸軍気象部を経て陸軍予科士官学校へ勤めたが、終戦後かねてから宿望の中央気象台付置の気象研究所へはいった。気象台に在勤中昭和25年（1950）にはそれまでに私自身がやった調査研究を主とし、それにわが国や諸外国における他人の業績をも加え小気候学（東京、古今書院発行）なる小冊子にまとめあげて出版した。終戦後まだ幾年もたっていない時であり、気象研究所構内の1室で自炊生活をしながら毎晩2時間ずつ執筆し、数ヶ月間で脱稿した。その原稿をその時すでに中央気象台長をやめておられた藤原先生に校閲していただき、かつ先生に序文までも書いていただいたのであった。退官後第1回の手術を受けられて一応落ちついておられた先生は快く私の申出でを容れて下さった。原稿をお届けしてから数ヶ月経ってから先生はわざわざ自身私の原稿を持って気象台に見えた。1頁毎に丹念に校閲して下さったらしく、鉛筆やペンでこまごまと訂正やら加筆されており、心から恐縮してしまった。私の原稿は先生がみずから作って下さったらしい美濃紙袋に大切に入れてあり、袋の表には写真のように先生の自筆で佐々倉航三著小気候学と丁寧に書かれてあった。その美濃紙袋の裏には記念品日本気象学会と書いてあったから、それは先生が退官の際に気象学会から贈られた記念品を包んだものであったのだろう。

私の原稿を発行書店へまわしてからあるとき先生が他の用件で気象台に見えられ、統計課の机で書きものをしておられた時、私が原稿のことで一寸したご相談に伺ったら、先生は直ちに椅子から立ちあがって直立不動の姿勢をとられ、“貴君のことなら如何なるご要求にでも応じますから遠慮なくお申しつけ下さい”と謹直な態度でいわれたときは本当に驚いてしまった。何んという純粋な真面目な学問のためならどんな努力をもおしまぬという真実な人なのかとただただ敬服するばかりであった。

先生は文学や宗教にも造詣が深くなかなかの名文家であった。通俗気象書の雲を掴む話などはたしか大正14年頃の作であったかと記憶するが、平明ではありかつ科学的に達意の文章であったことは世に定評のあるところである。気象台刊行の気象報告や論文などには時折りすばらしい名文が載っていた。専門の方でも寺田寅彦先生門下の第1人者であったが、先生は文学の藤原を志すことはひかえ



られたらしい。

しかし短歌などにも心を寄せられ、万葉集の主な歌などは暗誦されていたということであるし、時折佐々木信綱先生にも添削を願っておられたということである。こんなことからでもあったろうか毛筆を好まれたが、なかなか風格のあるよい字を書かれたように思う。宗教は仏典についてかなり深くまで勉強されたらしい。小学、中学、高校時代にはかなり多種に亘って運動を

なさったらしいが、大学卒業の年に肺尖カタルにかかれ、卒業試験後直ちに伊豆の宇久須に転地療養された。そこで禅宗熱心家の斎藤老人から白隠の夜船閑話などを貸してもらって安心立命の境地を得られたらしく、その結果全快したときは歓喜が天地に満つるようであったという。そしてそのかげに存在するいわば神意とか仏恩とか大自然とかいうような実体の不明な認識以上のあるものに対しての感謝が起って仏教へ心をさそわれていかれたらしい。特に般若心経、大乘起信論、維摩経などには関心を持たれたようであって、いつか欧州へ出張されたときは観音経を肌身離さずに持っておられたそうである。特に仏教に対する信仰は晩年重患を得られてからますます深くなっていかれたように思う。

先生は昭和16年7月岡田先生の後を継いで中央気象台長となられ、第2次大戦中は軍関係と緊密に連絡をとって作戦に協力された。激務のために心身ともに消磨されたらしく、昭和22年3月末日を以て退官せられ、後いくばくもなくして諏訪で第1回の手術を受けられ、一時小康を保たれたが、昭和25年4月再度の手術後半才で他界されたのであった。

回顧すれば岡田先生と藤原先生とは実に名コンビであった。岡田先生は多分に政治的手腕に恵まれた方であり、藤原先生は学問の方を引受けておられたから、岡田先生の気象台長在任中はある意味で

気象台が最も充実した時代ではなかったかときえ思われるのである。岡田先生は日本全国の気象事業の組織をガッチリと掌握され、その傍らで女房役の藤原先生はみずからの研究は勿論後進の指導に当てられたから日本の気象事業と気象学とは戦前すでに世界一流の域に達することが出来、終戦後日本へ来た米軍の関係者を驚かせたほどであった。

藤原先生は明治17年10月19日今の諏訪市角間新田（諏訪市から霧ヶ峯へ行く途中の部落）で光蔵氏の長男として生を受けられ、家督を弟の彦氏にゆずられた。信州人特に諏訪人に特有な性格を身につけておられ、議論好きで議論に強く、意地張りで特にシンの実に強い人であったが、その半面人には親切で、やさしいところも充分あり、涙もろい人でもあった。私も初めてお会いするまでは、その論文や文章から察して理に透徹した、こわい一方の学者とばかり思っていたが、実際にはむしろお人好しのところさえ多分に具えた人柄であるのが意外なほどであった。私の親友であった湖沼学者の吉村信吉博士（当時中央気象台海洋課勤務であった）が昭和22年1月に諏訪湖で殉職され、その葬儀が巣鴨の某寺で営まれたが、その際台長として弔詞を読まれた先生が“この世界的湖沼学者の湖沼にたおれる運命を如何ともなし難かったのであります”というや嗚咽にむせばれてしまって後の詞がつづかずしばし立往生されたのを覚えている。天才肌の人によくあるように忘れものをするのも有名であったし、思い違いをされたことも少なくなく、終戦後には特に激務と老令のためか、もの忘れがひどくなったようである。先生は手帳、さいふ、印鑑は勿論のこと馬鹿太い万年筆、扇子、めがねまでも1つ1つ長い紐につけ、それら数本の黒い紐を頸からかけておられたのは失礼ながら一興であった。またあるとき気象学会の席上先生お得意の富士山の側火山の螺旋状分布の図を薄い透写紙に墨で書いてこられ、これを戸板にはって指先で螺旋をたどりながら説明しておられたが、“どうも変です、変です”としきりに首をかしげておられた。居合わせた関口鯉吉博士が目ざとくも先生のミスに気がつき“藤原君それ裏返しじゃないのか”と指摘され、“ああそうでした”と答えられて一同哄笑したことをなつかしく思い出すのである。

他界される数ヶ月前たしか5月10日頃と記憶するが、阿佐ヶ谷の篠原病院に入院中の先生の許へようやく出来上った小著の小気候学を持参してお見舞に伺ったのであった。先生の病室のドアをノックするや否や中からいかにも張り切った力強い“ハイ—”という声が聞えた。藤原先生病床にあっては不相変の負けぬ気だなあと思わずほほえましくなった。30分間ほど雑談したが、これが先生との最後のお訣れとなってしまった。先生のご逝去をラジオで知った翌朝私は疎開先の野原を散歩しながら白雲の流れる秋空を仰いで何んともいいようのない気持ちにおそわれた。気象学を愛しそしてあんなにまで雲の研究に熱心であった先生の生命はもうこの世にはないが、雲だけは今日も又悠々と大空を流れてゆくのであった。

“雲を愛で雲を究めし師のみたまの翔けまさん空秋雲流る”

（静岡大学教養部）